

なきものよぞありける。うが中にモ、月花を弄ぶあはれをのべ、戀路をたどる心ばへを、ものしたるあはれは、さはとやらねど、つるぎをふみ、矢丸をけりても、ものどもせず、大君の邊にこそ死なめど、をたけびしつるころ、いとやんごどあかりけれ。さるを、こは亡國の音など、あげつらひひがむるは、全くいひかひあき、しりうごとなめり。そは、遠き國の文天祥、あるは方孝孺などの詩を、さだめしついでにや、いひけさんとは、したりけん。うもろもおのが身を、あきものにして、明治の御代を開き初めしければ、ろの潔きこと、雪を肩して、さきいつる梅の花の、春をえまたずして、風にちりまがとどし。あはれあはれとは、よのつねのことにて、いはんかたなく悲しきこと、のあたらしきことにこそあなれ。こをよまん人、このいきざしをもて、いきざしとせば、たゞに世の亂に處するよすがとあるのみならず、けだし、よるづのことよあたりて、成らざるは、あらざらん。うれば、志をたて、國を興す基といひつべければ、編める人の心さへゆかしうて、一言をかくなむ。

五月十九日江津川のつどひによめる文

下山陸治

けふこゝに、我同級の友監督の師と共にうちつどひて、親睦會を開きぬ。若葉の綠をたたりて、木の間もりくる風もすすしく、まして、同じ人々のつどひあれば、江津川の水の心もいさぎよく、苦學れいぶかしさも、今ははや、一時にあらひるゝげる心地ぞすある。まかはあれど、豈た、この比の景色に、心をあぐさむるのみあらんや。うれ、古

の歌に、

世の中よ樂しきものは思ふとちたなし心をかたるありけり
とぞよめるにあらすや。あはれ、かたみに思ふ人のうちとけて、同じ心を語るより、樂
まきことは世にあらぬぞかし。さて我等の世に生れいつる、先父母にはぐみ養
はれ、夫れより年をへて、世の中の事わざに處するよ至る迄、いとも重んずべきは師
友の間がらにあらすや。師友の感化は即第二の父母ともいふべきをや。我いふある
幸をえてか、この師を仰ぎ、又この友をばてはうごきまき御世の固めども、あらむ人の數にも
教られつ、學の業を勵みあひ、はてはうごきまき御世の固めども、あらむ人の數にも
いらたゝんころ、あらまほしけれ。」

末あかくにこらぬ江津の水の面をかはらぬ友の鏡とや見む

西省漫詠(承前) 教授 笠間 梧園

一谷懷古

懸軍如飛鳥、雄搏下自天、疾勢不得支、諸平
敗、爭船慘愴、鼓聲死、旗暗落日邊、回首茫茫、
八百歲、唯見興亡、輕於煙、依然鏡、楞峰、頭月
今日誰、吊九郎骨。

舟中夢沼田珂陽

偶爾相逢拍我肩、分明盃酒笑欣然、半宵夢
破、茫無跡、身在須摩萬里船。

夜過壇浦

已過三十六、長灘、山轉海、回亦壯、觀今古、蒼
茫、見殘月、興衰、遷轉付、頽瀾、萬乘天子、魂何
在、一世、姦雄骨、已寒、颯々、海風、吹髮去、悲歌
長嘯、倚船欄。